

京大理学部付属植物園創立80周年

16日に記念シンポ

歴史たどる講演や討論など

京大理学部付属植物園（左京区）の創立80周年を記念したシンポジウムが16日、同区の京大総合人間学部1号館1-102講義室である。午後1

～5時。入場無料。

植物園は1923年に設立。キャンパス内にあり、植物や虫の生態を調べる研究の場、都会に残る自然として親しまれてきた。大学法人化などとも控え、植物園の存在意義

や将来像を話し合おうと、利用者でつくる「京大植物園を考える会」が

シンポを企画。当日は植物園の歴史をたどる講演

のほか、生態学者の川那部浩哉・琵琶湖博物館長ら有識者を交えたパネルディスカッションなどがある。また、午前11時から園の観覧会も予定。

問い合わせは「考える会」の今村さん（080・5718・9136）。

【野上哲】

2003 年 12 月 1 日 (月)

京都大学新聞

植物園

シンポジウム

十一月十六日(日)、総合人間学部一号館二〇二講義室にて「京大植物園八十周年記念シンポジウム——温故知新——」が行われた。

はじめに、シンポジウムを主催した「京大植物園を考ふる会」の今村彰生氏(総合地球環境学研究所)により、「考ふる会」の趣旨説明と活動報告がなされた。京大植物園は理学部の付属施設として、研究の場や教育の場としてばかりでなく、憩いの場としても親しまれてきたが、二〇〇二年十一月に理学部により伐採が行われた。この伐採をきっかけとして、国立大学の法人化を前にして、研究利用者と戦後しばらくは植物学教

室により運営され、一九六四年に植物生態研究施設が設置され、植物学教室と共同運営がなされた。植物園は植物学教室の研究テーマの変化に伴い、栽培される植物から園の形態など運営方法も変化した。またある程度の管理は必要であり、必ずしも伐採しない方がいいわけではない。設置から

「雑草も大切な研究素材だ」という言葉は植物園の運営方針の脈流としてあるのではないかと述べた。

次に、植物園利用者の立場からの報告がなされた。植物園にてカタハリウスグモというクモの観察・研究により博士号を取得した渡部健氏(元理学研究科・動物生態学専攻)が、本人の

また管理・運営側に期待することは、あくまで自然モデル園として人為的に何かを足したり、引いたりすることはせず、安定した環境を維持することとした。と

他にも「植物園というよりも昆虫生態観察園と言った方がいいほど昆虫研究に使われている。また研究者としては、一般開放されるよりも自分達だけの秘密の花園の方がいい」(藤崎)、「京大の伝統であるフィールドワークは、フィールドが研究者を育て、研究者もフィールドを育てるもので

はなかったか、植物園にフィールドとしての付加価値を与えていく視点が園の運営から失われているように感じる」(湯本)などの意見が出た。会場から発言した理学部助教教授は「理学部内の議論とこの会の議論には、かなり隔たりがあるのを感じた。理学部としても理学関係者の利用が少ないことは認識している」と述べた。

終わりに、司会者の丑丸敦史氏(総合地球環境学研究所)は考ふる会としてこの会に出された意見を植物園運営委員会に提出することを明らかにし「是非も含めて、自分たちが集約した意見を委員会にも聞いてほしい。植物園の運営に関して京大当局がどのように協議していくのか、この会の議論を反映させてくれることを願っている」と語った。

様々な立場からの提言

戦後の植物園と

八十年たった今現在、生態系として安定していることがメリットとして挙げられるが、どのようなバランスで管理していくのか研究者が意見を出し合っている決めることが重要であると述べた。また植物園の設置に関わった郡場寛氏(元理学部植物学教室教授、故人)の

経験をもとにした植物園の利点を説明した。植物園は研究対象となる動物が多い、地図が手に入る、研究室からすぐに行くことができる、急激な環境の変化が無いなどの条件から長期的かつ日常的な観察が可能であり、十分研究に使えるフィールドであるとした。

休憩をはきみ、川那部浩

京大全体としてコンセンサスを取るべきだ」(辻)、「理学部以外の使用者の意見を反映させるため、あるいは、京大の教育活動の一環に組み込むためにも、京大全体として植物園をどうするかを考えなければなら

ない」(日高)という提言が出された。

の会に出された意見を植物園運営委員会に提出することを明らかにし「是非も含めて、自分たちが集約した意見を委員会にも聞いてほしい。植物園の運営に関して京大当局がどのように協議していくのか、この会の議論を反映させてくれることを願っている」と語った。

2003年12月16日(火)

京都大学新聞

寄生 京都大学新聞社
京都市左京区吉田京大構内
(075) 761-2054 直通
(075) 753-7531 (内線2571)
FAX (075) 761-6095
E-mail: kup@ops.dti.ne.jp
振替 01020-3-3909
1部100円

京大植物園

考える会が 提案書を提出

京大理学部付属植物園(京大植物園)に関して、園内の樹木伐採や整備を担当する非常勤職員の雇用問題など、一連の運営に対して一部利用者から不満の声が挙がっている問題で、利

用者・近隣住民などで構成される「京大植物園を考える会(考える会)」が二〇〇三年十二月十九日、理学部・植物園運営委員会(運営委員会)に対して、「管理運営方針に対する提案」を提出

していることが分かった。一月十九日までの回答を求めているが、運営委員会の対応はなされていない。

考える会は〇二年の樹木伐採をきっかけに学内外の有志によって設立された組織で、京大植物園の観察会や勉強会などを開催し、利用する立場から園のあり方を考えてきた。代表は琵琶湖博物館長の川那部浩哉氏と河野昭一氏が務める。両氏とも京大名誉教授。考える会は〇三年十一月十六日に「京大植物園八〇周年記念シンポジウム―温故知新―」を開催しており、その会場で集められた意見を集約した形の提案書提出となる。

提案書は運営委員会と同時に関尾登・理学研究科長、長谷あきら・理植物学教室主任と尾池和夫総長にも渡されている。内容は、京大植物園の生物群の多様性と数々の研究、教育に利用されてきた点を挙げて、植物園の重要性を示していることに加え、二〇〇二年の樹木伐採問題に関して、目的や決定過程に不明確な点があった原因は、現在の管理主体である理学部植物学教室内の研究課題や研究者の関心の差の影響が大きいことを指摘している。また最後に京大植物園の運営に關する考える会の希望として、研究・教育の場として自由に利用できること、生態系を考慮し面積を減らさないこと、全学から利用されるような組織のあり方を予算面なども含めて模索すること、運営に利用者の声を反映させるシステムを作

ること、運営に外部評価を導入し情報公開をすること、を求めている。

運営委員会のメンバーは岡田清孝(植物学)委員長、堀道雄(動物学)、戸部博(植物学)、曾田貞滋(動物学)、平野丈夫(生物物理)、加藤重樹(化学)、西田吾郎(数学)の理学研究科教官となっている。

提案書からは、法人化により植物園の消滅・質的低下の危機感が感じられる。情報公開や利用者の声を含めた運営方針など、運営委員会には早期の対応が期待される。

外部評価導入を

京大植物園運営案

「考える会」が提出

京都大理学部付属植物園(京都市左京区)の運営

方針をめぐる問題で、川那部浩哉京大名誉教授らがつくる「京大植物園を考える会」は二十二日までに、独自の「管理運営に関する提案」をまとめ尾池和夫総長に提出した。

同会が十一月に同植物園八十周年記念シンポジウムで、研究者や市民から寄せられた意見をもとにまとめた。

提案書は、同植物園は樹齢六十年前後の木々で形成され成熟した状態とし、植物や昆虫、鳥類の重要な研究フィールドと指摘。教育面でも、教養課程の地学実習や測量実習などで重要な役割を果たしているという。その上で、今後も教育や研究で自由に利用できる」と

を希望、園を「切り売りしないで」と要望している。さらに、国立大法人化に向け、植物園の管理についても外部の評価を受けるべきだなどとした。

同会は提案書を理学研究科長らにも送った。